

母の総行計画



母の紵け台

「またやってしまった」

そうつぶやきながら私は、本を閉じると、しょんぼりホームに降りた。何度繰り返しても直らない厄介なくせ、本を読みだすと周りから音が消え現実から遊離してしまうのだ。

今回のように電車などに乗っていて乗り過ごすのは日常茶飯事、ホームに立ったまま何本もの電車をやり過ごしていたこともあった。返事をしないと叱られるだけでなく、煮物を焦がし鍋までダメにしたり、失敗談には事欠かない。歳を重ねて自重はしているが、ついやってしまう。

子供の頃、漫画しか読まなかった私を物語の世界にいざなってくれたのは、昭和三十四年に講談社から刊行された『世界少年少女文学全集』だった。

四年生だったある日、

「こんなの読む？」

そう言って母が、割烹着のポケットから取り出したチラシを見せた。それは、何度も見たらしく、しわだらけでかなりくたびれていた。

「うわー、すごい、読む、読む！絶対読む」

すぐにそう答えた。そのカラーのチラシには、

『全50巻毎月配本、函入り、背表紙は皮、表紙はクロス装金箔押し』

などと踊るような文字が印刷されていた。

狭い社宅の小さな本棚に豪華な本が一冊ずつ並んでいき、そこだけスポットライトが当たっているようだった。グリムやアンデルセンの童話だけでなく、アーサー王や孫悟空、ハイジやアン、三銃士やドリトル先生、牛若丸や弥次喜多にも出会った私は、すっかり夢中になった。小公女セーラと一緒に空想の部屋に住み彼女が幸せになった時は本を抱きしめた。

その本棚の前で母はいつも仕立物をしていた。押し入れから古びた紵け台を取り出し、反物を挟んでは縫っていた。手作りの針山には、色々な絹糸が通された針や待針が何本も刺してあった。小さい頃から母が縫物をしているのはごく当たり前の姿だったけれど、

「明日までに仕上げないと」

そう言いながら、よく夜更けまで針を動かしているのは大変そうにみえた。

「お母さん、なんでそんなにたくさん着物縫うの？」

「呉服屋さんの仕事をしてるから急ぎの物が多いんよ。その方が仕立代がいいからね」

「ふーん。あのね、今読んでる若草物語おもしろいでえ」

「それ映画は見たよ。ジョーが好きやったわあ。本も読みたかったな。お母さんが子どものときは『女の子は本なんか読まんとお針しなさい』言われてね、友だちの家でこっそり読ませてもらったりしてたけどね」

「えー！なんでー」

「まあそういう時代やったんかな、お兄さんは本買ってもらったのにね。ずっと本が読みたかったんや」

「かわいそうやったね、お母さん。本ってこんなにおもしろいもんねえ」

「だからね、お母さん内職頑張って、あなたに五十巻揃えて読ませてあげたいんやわ」

よく扁桃腺を腫らして熱を出す子供だったが、ちょっと熱が下がると、布団の中に本を持ち込みこっそり読んでいた。その疲れで翌日も学校を休まなくてはならなかったので、叱られながら同じことを繰り返していた。母は、思った以上に本好きになってしまった娘をどう思っていたのだろうか。

今は、老眼が進み何かと煩わしいし、夜更かしもできない。でもやはり本を読まずにはいられない。登場人物

と一体になって物語の中をたゆたう。そして、読み終わってページを閉じ、表紙をそっと撫で、ほわーとため息を吐く。その時の至福感が何物にも代えがたいのだ。母の膝にいつも布があったように、私の膝には本がある。

もうすぐ母が亡くなって三十八年の命日が来る。燃やしてしまったあの母の絨け台に『ありがとう』を伝える術があればいいなと思う。